

特集 〈緑蔭図書紹介〉

辞書と人間

上野 浩道

毎年四月の新学期になると、季語のように新聞などで辞書の広告が競って出る。私の子ども時代に比べて、実に多様な数多くの辞書があるものだと感心してしまう。それだけ辞書に対する需要と信頼が如何に大きいかうかがわれる。

ただ、辞書について気になることがある。それ

は辞書に頼りきってしまうことである。例えば、この辞書にこう書かれているから正しいというよなものである。そして、挙げ句のはてに、この辞書の方が信頼できると権威づけてしまうことになる。それだけ辞書は魔力をもっていると見えよう。

辞書には辞書をつくった人々の情熱と魔力がこ



もっている。このような辞書づくりに苦闘した人たちの人生と人物像を歴史的に詳細にまとめたのがジョンサン・グリーン『辞書の世界史』（三川基好訳 朝日新聞社 一九九九年）である。この本は訳本で二段組五五四ページもある大部なものである。著者はイギリス人であるが、ものごとこだわる姿勢とエネルギーには圧倒される。イギリスの書店では分厚い本が積み上げてあったり、公園でチェアに寝そべりながら大部な本をゆつたり読んでいる光景を見ることがある。その豊かな時間の使い方には羨ましく感じるが、著者の方にもこのように読者たちを惹きつける豊かな知識とエネルギーが備わっていることが本書からも伝わってくる。

辞書をつくる人は辞書編纂家（レキシコグラファー）と呼ばれる。その定義は有名なサミュエル・ジョンソンによると「辞書を作る者。退屈な

仕事をこつこつ続ける人畜無害の存在で、言葉の起源をたどったり、その意味を細々と書き綴ることには浮き身をやつす」とある。このような人々の仕事と人生を本書は紀元前二五〇〇年の古代メソポタミアの粘土板から書き起こしている。そして、ギリシャ・ラテンからイギリス、アメリカへと辞書づくりに励んだ人々の歴史が記述されている。本書のもともとの原題は「太陽を追って」とつけられ、その出典はサミュエル・ジョンソンの一七五五年版『英語辞典』への序文から来ているという。すなわち「この仕事を始めたとき、私は一語たりとも、そして何ごとをもなおざりにすまいと決心した。その上で私は、あまたの文学作品や、知る人もまれな北方の学問の成果に読みふけて無上の時を過ごせるものと思っていた。宝库に分け入るたびに……新たな発見に報いられ、それを誇らかに人類に知らしめることができるだ

ろうと。……しかし、辞書編纂家は所詮いつまでもそのような詩人の夢を見続けていることはできなかった。……彼にとって完璧を求めることは、いにしえのアルカディアの民のごとく、太陽を追いかけるに等しいことだった。あの丘の向こうに沈んだと、そこまでたどり着いてみても、少しも太陽には近づいていないのだ」という言葉からである。辞書づくりだけでなくどのような仕事をする者にとってもこの言葉は通じるものがある。

私自身、はじめて辞書づくりを経験したのは民間教育史料研究会編『民間教育史研究事典』（評論社 一九七五年）の時のことである。日本の教育や教育学の言葉が圧倒的に欧米の近代教育学の翻訳、移入からきている現状に対し、日本の民間の教師たちが日常の教育実践から営々と積み上げてきた教育の語彙を掘り起こし、それにまつわる書物、論文、学校、人物、事件などを協同で検討

したことである。まだ大学院生の頃で何回も合宿したことだけでなく、辞書づくりのきっかけとなる最初の発表をしたことから今でも印象に残っている。忘れもしないが、「生活指導」という言葉

について、その定義、内容、言葉の成立、展開、それに関係する研究などについて報告した。もちろん宮坂哲文『生活指導の基礎理論』（誠信書房 一九六二年）を頼りにしたが。

この事典の中に下中弥三郎の項目がある。彼は大正時代に「教育運動」、「学習権」、「自治」などの概念を明確にしていた教育改造運動の指導的組織者であり、理論家であった。その彼が辞書づ



くりを始めるのは、学校に行っていない、また行けなかった人々のために知識を提供する豆辞典が出發であった。彼自身、幼少の頃から兵庫県立村の半農、半陶工の生活を送っていた経験から、社会生活に必要な教材、教具としての辞書というもの的重要性を認識したものと思われる。社会が学校となるために辞書は欠かせないものであった。その後、彼の創立した平凡社の仕事は辞書の出版が中心となっていくのである。

学校教育関係の「モノ・コト」に関して親しみやすく、読みやすいものとして佐藤秀夫『学校教育うらおもて事典』（小学館 二〇〇〇年）がある。日本教育史の碩学によるこの事典は「学校においてありふれたとされていながら、その意味が問い返されていない現象や事物、あるいは近い過去に存在していて、今なお想起されるべきなものが忘れられている事象、さらに、今日しきりに論

じられているものの史的観点を欠いているために『本質』がぼかされていると考える事柄など」を取り上げられていて、非常に興味深い。なお、本事典は、同じ著者による『学校ことはじめ事典』（一九八七年）の続編にあたるものである。

最後に、寺崎昌男編『教育名言辞典』（東京書籍 一九九九年）をあげておこう。教育に関しての古今東西の名言を集め、それに解題を加えたもので、人類が昔から教育について考えてきた知恵を通して、これからの教育を考える大事なヒントを与えてくれる。特に、学ぶ、求める、知る、考える、育つ、生きる、関わる、教える、育てる、築くといった動詞群をもとに言葉が選ばれ編集されている点で非常にユニークである。教育学の入門書としても、また、世界教育思想の書物としても位置づけることができる。

（お茶の水女子大学）